

公益社団法人日本動物学会 平成 24 年度事業報告（案）

1. 定時社員総会

平成 24 年 9 月 14 日(金)大阪大学豊中キャンパスで開催主な議案は

- ①平成 24 年度 社団法人日本動物学会事業報告
- ②平成 24 年度 社団法人日本動物学会決算報告（貸借対照表、損益計算書、及び財産目録）

2. 学術集会の開催

平成 24 年 9 月 13 日から 15 日まで、第 83 回日本動物学会大会を大阪大学で開催。大会準備委員会を組織して、講演、シンポジウム、高校生発表等を行った。（公益 1）

3. 学術誌の刊行

Zoological Science (ZS)の刊行（第 29 巻 7 号～第 30 巻 6 号）。年 12 回発行、1000 頁。

ZS の編集は、編集委員会委員（海外委員 2 名を含む）が行った。編集委員会は 1 回開催（公益 1）

4. Web による広報活動の促進とニュースの発行

HP を利用して、大学等研究機関による職員募集、科学者によるセミナー、シンポジウムの開催通知、動物学関連書籍の書評などを随時掲載した。ニュースを月 1 回発行。

5. データベース構築(ZS 過去分)

ZS 過去分をデジタル化し、Biodiversity Heritage Library との連携により、Open Access による情報の共有を行った。（公益 1）

6. 研究の表彰

・日本動物学会賞

会員を対象とし、動物学研究に新たな知見をもたらした研究に授与。毎年 2 件を、学会賞等選考委員会による審査を経て、理事会の審議により以下のように決定した。

1.神谷 律（東京大学名誉教授）

「鞭毛運動におけるダイニン機能とその調節機構の研究」

2.沼田英治（京都大学大学院理学研究科・教授）

「動物の生活史を調節する環境要因および生物時計の研究」

・日本動物学会奨励賞

会員を対象とし、今後の動物学研究を推進することが期待される若手研究者に授与。毎年 2～3 件を、学会賞等選考委員会による審査を経て、理事会の審議により決定した。

1.坂本 浩隆（岡山大学大学院自然科学研究科・理学部附属臨海実験所/共同利用拠点（UMI）・准教授）

「本能行動を制御する作用機序に関する神経内分泌学的研究」

2.二橋 亮（産業技術総合研究所・研究員）

「昆虫の体色・斑紋形成と進化に関する研究」

・Zoological Science Award

平成 23 年に出版された ZS 掲載論文より、各分野において、優秀でインパクトのある論

文の著者に授与する。ZS 編集委員会による審査を経て、理事会の審議により決定した。(公益1)

1. ZOOLOGICAL SCIENCE 27: 91-95

Tom Humphreys, Akane Sasaki, Gene Uenishi, Kekoa Taparra, Asuka Arimoto and Kuni Tagawa

Regeneration in the Hemichordate *Ptychodera flava*

Hemichordate Ptychodera flava の再生過程を記載したこの論文は、半索動物の再生と発生を研究する上で基本的な研究資料として今度も、長く引用され続ける内容を持っている。今後半索動物のゲノム解析データが公開され、cDNA クローン等研究ツールが整備されることでこの論文に記載された再生過程はその進化的側面だけでなく、生物の再生原理そのものの理解にも資する資料となると期待される。

2. ZOOLOGICAL SCIENCE 27: 279-284

Daisuke Takao and Shinji Kamimura

Single-Cell Electroporation of Fluorescent Probes into Sea Urchin Sperm Cells and Subsequent FRAP Analysis

精子鞭毛の中央は微小管細胞骨格である軸糸が貫いている。運動のエネルギー源である ATP は鞭毛の根元に存在するミトコンドリアで合成されるが、長い鞭毛の先端までどのように ATP が拡散しエネルギー供給をするのかはわかっていなかった。本論文は、精子に蛍光色素を導入するためのエレクトロポレーションを開発し、その系を用いて精子鞭毛内の拡散定数を FRAP により論文である。本論文は、鞭毛軸糸と細胞膜の間の細胞質の物理化学的性質に関して得られた知見の他、鞭毛に物質を導入する系を確立したことも高く評価することができる。鞭毛運動の研究には界面活性剤を用いた細胞モデルが頻繁に用いられる。著者らが開発した方法をさらに改良することにより、生きた精子を用いてより生理的な解析を行うことが可能となった。

3. ZOOLOGICAL SCIENCE 27: 427-432

Hideki Endo, Daisuke Koyabu, Junpei Kimura, Felix Rakotondraparany, Atsushi Matsui, Takahiro Yonezawa, Akio Shinohara and Masami Hasegawa

A Quill Vibrating Mechanism for a Sounding Apparatus in the Streaked Tenrec (*Hemicentetes semispinosus*)

テンレックの一種 *Hemicentetes semispinosus* は背部にある特殊な棘毛を振るわせて音響コミュニケーション装置として用いている。このユニークな発音システムについて、著者らは詳細な形態学的解析を行い、その棘毛を動かす装置が体幹の皮筋が変化したものであると結論、quill vibrator disc と名付けた。この特異な発音システムは、動物学的に大変興味深く、そうした事象を探究する研究姿勢を高く評価できる。

4. ZOOLOGICAL SCIENCE 27: 559-564

Eiji Motohashi, Takeshi Yoshihara, Hiroyuki Doi and Hironori Ando

Aggregating Behavior of the Grass Puffer, *Takifugu niphobles*, Observed in Aquarium

During the Spawning Period

大潮の日に海岸に集合して産卵するクサフグの産卵リズムを水槽内で再現した論文。この水槽内での行動解析にフィールドでの観察も併せ、内因性の月周産卵リズムで産卵することを解明。ほとんど不明の概月時計の解析に有用な実験系を提示している。

5. ZOOLOGICAL SCIENCE 27: 673-677

Tomonari Kaji

Ontogeny and Function of the Fifth Limb in Cypridocopain Ostracods

節足動物において、その付属肢の形態は脱皮するたびに変わる。種によっては、それに伴ってその機能までも変更される場合がある。本研究では Ostracods (貝虫類) について変態期の足の形態に注目し、5番目の付属肢の外骨格と筋肉の形態について解析を行った。その結果、メスにおける脚の変化は主に外骨格の細胞増殖によるものであり、オスでは外骨格と筋肉の両方が形態変化に関与すると結論づけた。節足動物の付属肢の形態ならびに機能の変化というユニークなテーマに挑んだ、極めて独創的で意欲的な研究である。

6. ZOOLOGICAL SCIENCE 27: 723-728

Sumire Hojito, Norio Kobayashi and Haruo Katakura

Population Structure of Aegialites Beetles (Coleoptera, Salpingidae) on the Coasts of Hokkaido, Northern Japan

イワハマムシと呼ばれる海岸の岩の隙間にのみ生息する甲虫を材料とした分子系統地理学的研究である。北日本から断片的にしか知られていなかった本種の詳細な分布調査と集団遺伝学的解析に基づき、北海道沿岸には 2 つの遺伝的に異なる集団が生息していることを明らかにした上で、分類学的考察や鮮新世・更新世から現在にいたる分布パターンの形成シナリオまでも論じた労作。

7. ZOOLOGICAL SCIENCE 27: 842-850

Naoyuki Ohta, Takeo Horie, Nori Satoh and Yasunori Sasakura

Transposon-Mediated Enhancer Detection Reveals the Location, Morphology and Development of the Cupular Organs, which are Putative Hydrodynamic Sensors, in the Ascidian *Ciona intestinalis*

エンハンサートラップラインを用いたユウレイボヤ cupular organs 発生過程と成体での構造の詳細な記載論文である。尾索類の cupular organ は水圧を感知する感覚器であり、脊椎動物が持つ側線器との相同性を考察するうえでの重要な知見である。ホヤを用いた研究は初期発生から器官形成期にいたる発生学的研究が多くを占めるが、この論文はホヤ成体の表現型記載論文としても興味深い。今後、脊索動物の感覚系の進化に関する理解が進んでいく上で、この論文の重要性は増していくであろう。

8. ZOOLOGICAL SCIENCE 27: 888-894

Yuji Ise and Jean Vacelet

New Carnivorous Sponges of the Genus *Abyssocladia* (Demospongiae, Poecilosclerida,

Cladorhizidae) from Myojin Knoll, Izu-Ogasawara Arc, Southern Japan

小笠原沖水深約870メートルの海底から発見されたシンカイハナビ属とよばれる肉食性海綿類2種を骨片の詳細な電子顕微鏡観察に基づいて新種記載した論文である。生息場所における生時の形態データは無人潜水艇を用いなければ得られなかった貴重なデータである。貧栄養岩礁深海底という、従来着目されることの少なかった生息域における底性生物の多様性解明に貢献する重要な研究と言える。

・日本動物学会女性研究者奨励 OM 賞

安定した身分で研究を続けることが困難であるが、強い意志と高い志を持って研究に意欲的に取り組もうとする会員を、学会賞等選考委員会による審査を経て、理事会の審議により決定した。

1.岩越 栄子（広島大学大学院総合科学研究科・非常勤研究員）

「新規生理活性ペプチドの同定と機能解明」

2.廣瀬慎美子（お茶の水女子大学 湾岸生物教育研究センター 特任講師）

「刺胞動物の生殖巣形成と藻類伝達様式の多様性に関する研究」

・成茂動物科学賞基金奨励賞

動物学の全分野でユニークな研究を展開する会員を振興賞の候補者とする。会長及び副会長2名を含む会長指名による2名の委員で選考し、理事会の審議により決定した。

秋山-小田 康子（JT生命誌研究館）

「オオヒメグモの体軸形成の研究」

・若手研究者国際会議出席補助金（江上基金・川口基金）

4月から9月（江上基金対象）および10月から3月（川口基金対象）に開催される海外国際会議に出席する若手研究者を対象に、渡航費を補助する。学会賞等選考委員会による審査を経て、理事会の審議により決定した。

江上基金 近藤 興（広島大学大学院理学研究科 博士課程3年）

竹花 佑介（基礎生物学研究所）

川口基金 角井 敬知（北海道大学大学院理学研究院）

八木 光晴（長崎大学水産学部）

・動物学教育賞

活発な啓蒙活動等により動物学の社会への普及に著しく貢献した個人または団体とし、本学会の会員・非会員を問わない。国籍も問わない。理事で構成する委員会で審議し、理事会の審議により以下のように決定した。（公益1）

松田 良一（東京大学大学院総合文化研究科・教授）

7. 動物学の普及活動、生物科学学会連合による生物学の連携、協調活動

国際生物学賞、国際生物学オリンピックの推進を図り、支援を行う。また、生物科学学

会連合活動を生物系学会と連携して推進する。(公益1)

8. 支部による活動

・北海道支部

平成25年度公益社団法人日本動物学会北海道支部大会(第58回)

場所:北海道教育大学札幌校 講義棟3階306室

平成25年8月24日(土)9:20~17:30(20:00まで懇親会)

参加者:65名

一般発表(口頭発表)演題数:20

特別講演(高橋孝行先生):1

高校生によるポスター発表:3

大会のスケジュール:口頭発表(午前の部)、高校生によるポスター発表、役員会、総会、口頭発表(午後の部)、特別講演、優秀発表賞授賞式、懇親会(公益1)

・東北支部

平成24年度日本動物学会東北支部大会

平成24年7月21日(土)9:00~18:15(一般講演、総会、高校生による研究発表)

山形大学理学部1号館1階14番講義室

一般口頭発表:23件

高校生口頭発表:10件、高校生ポスター発表:2件

*親子で楽しむ動物学13

平成24年8月5日(日)13:00~15:00

山形大学理学部2号館310室

講師:千葉親文先生(筑波大学・生命環境系)

講演1:驚くべきイモリの再生能力

講演2:イモリの保全を目指してーいもりの里の取り組みについてー

講演終了後、タッチプールでイモリに触れながら質疑応答を行った。

参加者:小中高生:23名、大学生10名、一般21名 合計 54名

*弘前大学農学生命科学部動物標本室一般公開(動物学会東北支部後援)

弘前大学農学生命科学部 動物標本展示室

平成24年10月26日(金)~10月28日(日)

・関東支部

(1)支部主催公開講演会

日時:2012年7月21日(土)午後1時~4時

会場:東京医科歯科大学歯学部特別講堂(歯科棟南4階)

名称:関東支部会公開講演会「驚異の生命ー宇宙を目指す動物たちー」

講演内容:

宇宙に行った動物たちと「きぼう」宇宙実験のための挑戦

(矢野 幸子、JAXA)

小さな宇宙飛行士「線虫」の活躍

(東谷 篤志、東北大学)

キンギョのウロコ (骨モデル) を使って宇宙実験

(鈴木 信雄、金沢大学)

メダカで目指す宇宙医学-新たな軌道上実験へ向けて-

(浅香 智美、JAXA/ 東京大学)

宇宙に進出できるか? 極限環境に耐えるクマムシ

(國枝 武和、東京大学)

参加者数: 約 90 名

演題数: 5

※ 本講演会は宇宙航空研究開発機構との共催事業として開催された。

(2) 関東支部大会および関東支部総会

日時: 2013 年 3 月 16 日 (土)

会場: 東京工業大学大岡山キャンパス (東京都目黒区大岡山 2-1-2-1)

参加者数: 333 名 (内会員 189 名)

プログラム

10:00 受付開始、ポスター掲示

10:30-11:10 公開授業 (大岡山西 9 号館 2 階デジタル多目的ホール)

11:30-13:00 総会、昼休み

13:10-15:00 シンポジウム (大岡山西 9 号館 2 階デジタル多目的ホール)

15:10-17:00 ポスター発表 (大岡山西 9 号館 2 階メディアホール)

17:00- 懇親会 (生協食堂)

・シンポジウム

「受精から細胞分裂へ」

1. 立花和則 (東京工業大学生命理工学研究科)
2. 板橋岳志 (早稲田大学 理工学術院 物理学科)
3. 三好洋美 (理化学研究所 A S I 超精密加工技術開発チーム)
4. 細谷浩史 (広島大学理学研究科)

・ポスター発表 演題数 95、

・中・高校生ポスター 演題数 22 (発表者・引率教員 77 名、参加者 95 名)

・公開授業「生き物は円柱形」演者: 本川達雄 (東京工業大学生命理工学研究科)

参加者: 小学生 42 名、付き添いの父兄、小中高の先生、一般の方を含めて 104 名、合計 146 名

・中部支部

① 支部大会

日時：平成24年11月17日（土）－18日（日）

会場：松本市浅間温泉みやま荘

一般口演・ポスター発表

演題数：口頭発表 25題、

ポスター発表 25題

高校生口演発表 2題 高校生ポスター発表 2題

公開フォーラム 「生物学のこれから」

講演1. 島田正和 氏 「新学習指導要領による生態・進化教育の新しい流れ」

講演2. 斎藤淳一 氏 「国際生物学オリンピックと生物教育」

公開シンポジウム 「極限に生きる動物たち」

講演1. 鈴木忠 氏 「怪物の生物学：クマムシの不思議」

講演2. 東城幸治 氏 「砂漠に生きる新規昆虫目・カカトアルキの謎」

講演3. 藤原義弘 氏 「海底に沈んだ鯨が支える生態系」

講演4. 宮崎淳一 氏 「極限に生きる深海生物群集の進化」

生物アート展示・販売

アニマック生物アートサークル「生物部」

ハサミックワールド浅見雅信

参加者：230名

・近畿支部

近畿支部大会（公益1）

日時 2013年5月11日（土）13:00～

場所 大阪市立大学梅田サテライト

参加者数 54名（うち会員 25名）

1. 支部総会

2. 会員による研究発表

多面的なアプローチによる線虫の温度適応に関わる遺伝子の単離

○園田悟・木下ゆかり・古川翔子・遠藤美喜子・上原湧将・中本隼斗・水谷仁美・太田茜・久原篤（甲南大・理工）

桿体と錐体におけるアレスチンによる視物質不活性化の比較

○富塚順子¹・橘木修志^{1,2}・松川淑恵・河村悟^{1,2}（¹大阪大学・大学院生命機能研究科・²大阪大学・大学院理学研究科）

同所的に分布するアブラゼミとクマゼミはどういう時間帯に鳴くか？

○村井幸輝郎・沼田英治（京大・院理・動物）

魚類における優劣関係の記憶時間

○堀田崇・幸田正典（大阪市大・院理・生物地球）

ホヤ卵細胞質再配置における精子星状体形成、移動に対するアジ化ナトリウムの影響

○白井琢馬 1・石井宏和 1・西方敬人 1,2 (1 甲南大・FIRST・2 甲南大・FIBER)

カタユレイボヤ卵母細胞の人為的成熟過程における形態変化の詳細な観察

○国広潮里 1・西方敬人 1,2 (1 甲南大・FIRST・2 甲南大・FIBER)

サルマラリア原虫のゲノム解読によって明らかになった三日熱マラリア原虫の宿主特異性の分子基盤に関する手がかり

○橘真一郎 1,2・田邊和裕 1,3 (1 大阪大学・微生物病研究所・マラリア学研究グループ・2 大阪市立大学・大学院理学研究科・生物地球系専攻、3 大阪大学・微生物病研究所・分子原虫学分野)

カイヤドリヒドラクラゲ(刺胞動物門)の放卵について

○久保田信(京都大学・瀬戸臨海実験所)

3. 特別講演

Keys to writing great papers: Advice for graduate students and young researchers

Elizabeth Nakajima (Dept. of Biophysics, Kyoto University)

・中国四国支部

① 支部大会

<中国四国支部第65回大会(中国四国地区生物系三学会合同大会)>

日時:平成25年5月11日(土)ー12日(日)

会場:徳島大学常三島キャンパス

演題数:口頭発表 29題(動物13題、植物9題、生態7題)

ポスター発表 40題(動物13題、植物13題、生態14題)

公開講演会「使って守る生物多様性」講演3題、ポスター3題

高校生ポスター発表 37題

参加者:三学会関係 136名(動物54名、植物41名、生態41名)

高校関係 160名

② 県例会等

<2013年度広島県例会>

日時:平成25年3月2日(土)13:00~16:00

会場:広島大学大学院理学研究科

演題数:ポスター発表21題

参加者:約40名

<高知県例会(土佐生物学会2012年度例会)>

日時:平成24年12月9日(日)

会場:高知大学メディアの森 6階メディアホール

講演数:13題(うち3題は日本動物学会会員)

参加者:54名

<2012年度愛媛県例会>

日時：平成 24 年 12 月 15 日（土） 13：00～15：00

会場：愛媛大学理学部・共通ゼミ室（419-2）

講演数：4 題

参加者：25 名

<山口大学理学部サイエンスワールド 2012>

日時：平成 24 年 10 月 28 日（日）

場所：山口大学吉田キャンパス

内容：学生による科学体験企画を中心とした、地域住民への理工系の魅力発信。

（出展企画数：19、高校生ポスター発表 4 校 5 テーマ）

参加者：582 名

<岡山県例会>

日時：平成 24 年 7 月 19 日（木） 14:00～18:00

場所：岡山大学理学部講義室 21

講演数：4 題（特別講演 2 題）

参加者：60 名（公益 1）

・九州支部

三学会合同鹿児島例会（同時開催:シンポジウム「奄美群島の生物多様性」）

日時： 2012 年 7 月 7 日（土）

場所： 鹿児島大学郡元キャンパス

演題， 演者：

1. 沖縄やんばるの森からみた奄美大島の森林生態系:固有動物と外来種問題について
森林総合研究所九州支所 小高信彦
2. 徳之島の森林生態系:自然・人為攪乱による特性と危機
鹿児島大学 米田 健
3. 奄美群島の昆虫相
鹿児島大学 山根正気
4. 奄美群島の植物相、その虚と実
鹿児島大学 宮本句子
5. 大隅諸島～奄美群島の非海産貝類(陸産貝類+淡水産貝類)
鹿児島大学 富山清升
6. 九州南部～奄美群島の陸産・淡水産カニ類
鹿児島大学 鈴木廣志
7. 鹿児島県生物多様性戦略の策定とレッドデータブックの改訂
鹿児島県自然保護課 則久雅司

参加者数：155 名

第 2 回九州地区動物学談話会

日時： 2012年8月25日(土)

場所： 熊本大学合津マリンステーション

演題, 演者：

1. ミツバチの学習した匂いによって生じる歩行パターンの解析と尻振りダンス音刺激の影響

山下俊也 (福岡大学)

2. フタホシコオロギの嗅覚学習に対するカフェインの促進的効果

杉町誓児 (長崎大学)

3. ゴキブリのアンテナにおける能動触覚系の生理学的研究

武田慎也 (長崎大学)

4. Effect of ocean acidification on feed intake in the purple sea urchin

Strongylocentrotus purpuratus

王貴寧 (長崎大学)

5. Molecular Cloning and Subcellular Localization of an Testis-specific Adherence Junction Protein CEACAM2 Expressed in Rat Testis

Elsaid Salaheldeen (九州大学)

6. 話題提供

吉国通庸 (九州大学)

7. *Aiptasia* sp. 白化初期における共生藻の変化

石野史人 (九州大学)

8. カマキリによる捕獲か防御の行動選択：先行視覚刺激が及ぼす影響

内田裕 (九州大学)

9. カマキリ摂食行動における味覚の効果

山下貴志 (九州大学)

10. 話題提供

井上豊大 (熊本大学)

参加者数： 31名

熊本大学理学部主催公開実習「遺伝子を見てみよう」

日時： 1回目 2012年10月28日(日); 2回目 2012年11月18日(日), 各10時~17時

場所： 熊本大学理学部

対象： 熊本県内の高校生

内容：

1) 遺伝子の説明

2) 自分の口内上皮細胞からDNAを調整して、PCRにより繰り返し配列があるDNA領域を増幅(個人識別)

3) 蛍光顕微鏡による自分の細胞と核を観察

4) 電子顕微鏡によりDNAおよび細胞を観察

5) 遺伝子改変個体(メダカとカエル)の観察

参加者数： 1回目 5名；2回目 13名

三学会合同熊本例会

日時： 2012年11月10日(土)

場所： 熊本大学理学部

演題， 演者：

1. コガタブチサンショウウオとブチサンショウウオの資源

坂本真理子(株式会社エフトレック)

2. Heart of Borneo ---- 熱帯原生林の河と森-----

副島顕子(熊本大・院・自然科学)

3. 潮間帯水槽を用いたタイドプール魚類群集の空間利用解析

新垣誠司(九州大・理・天草臨海)

参加者数： 24名

三学会合同宮崎例会

日時： 2012年11月10日(土)

場所： 宮崎大学教育文化学部

演題， 演者：

1. カブトガニ日本集団の遺伝的構造および寄生性ウズムシとの比較系統地理の試み

西田伸(宮崎大学教育文化学部)

2. 一本の木になるドングリは均質か？ 一種子形質のばらつきと種子の生存過程の関係ー

高橋明子(京都大学野生動物研究センター幸島観察所)

参加者数： 12名

三学会合同福岡例会

日時： 2012年12月8日(土)

場所： 九州大学21世紀交流プラザII

演題， 演者：

1. 生物の宝庫ニューカレドニア～南の島のいきものたち～

生態： 中原 亨(九大・システム生命学府)

2. 高等植物の葉緑体機能と葉の分化制御機構

植物： 楠見健介(九大・理学研究院)

3. 生殖細胞とセルトリ細胞間の接着分子 CEACAM について

動物： 飯田 弘(九大・農学研究院)

参加者数： 25名

三学会合同鹿児島例会

日時： 2012年12月8日(土)

場所： 鹿児島大学理学部

特別講演演題： 「国立公園に指定された海底とサツマハオリムシ」

特別講演演者： 大木公彦（鹿児島大学名誉教授）

高校生によるポスター発表： 30 件程度

高校生による課題研究口頭発表－鹿児島県高校理科部会推薦：

1. ミヤマクワガタの話題

国分高校

2. 鰻池のスジエビの話題

錦江湾高校

参加者数： 130 名

三学会合同長崎例会

日時： 2012 年 12 月 15 日（土）

場所： 長崎大学水産学部

演題，演者：

1. フタホシコオロギの嗅覚学習に対するメチルキサンチン類の効果

○杉町 誓児・岡田 二郎（長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科）

2. 昆虫アンテナの接触刺激に対するアンテナ運動神経の応答

○武田 慎也・岡田 二郎（長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科）

3. 長崎県産葉上苔類（カビゴケ）の生態

○矢野 元 a・中西こずえ b（a 長崎大学環境科学部；b 長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科）

4. 長崎県南部のヨシ群落

○白濱一之心・中西こずえ（a 長崎大学環境科学部；b 長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科）

5. ロウソクギンポ保護雄の全卵食行動：性ホルモンに制御された繁殖サイクルに着目して
松本 有記雄 a・立石哲済 b・征矢野 清 a・○竹垣 毅 a（a 長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科；b 長崎大学水産学部）

6. 幼生輸送を介した巻貝（イボキサゴ）局所個体群の連結性—数値流動モデルに基づいた
天草の干潟保護区の提案

○中野 善 a・竹内清治 b・本郷友一朗 b・玉置昭夫 b（a, 長崎大学大学院生産科学研究科；
b,長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科）

7. 軍艦島（端島）の植生と植物

○中西弘樹・岸本佑也（長崎大学教育学部）

参加者数： 30 名

三学会合同大分例会

日時： 2012 年 12 月 16 日（日）

場所： 大分大学教養教育棟

演題，演者：

1. 乙津川における塩湿地植生の再生

須股 博信

2. 高崎山ニホンザル群における「石遊び」の研究 II

大分県立大分舞鶴高等学校

3. 院内町のオオサンショウウオの生態について

大分県立安心院高等学校

参加者数： 40 名

第 66 回 日本動物学会九州支部大会（三学会合同熊本大会）

日程：2013 年 5 月 18 日（土）～19 日（日）

場所：熊本大学 黒髪南地区キャンパス 理学部

動物学会一般講演 演題，演者：

ポスター発表

1. 匂い学習と学習した匂いにより誘発される歩行様式の季節比較

* 藍浩之・宮本奈央・山本千尋・山下俊也（福岡大・理・地球圏科学）.

2. ミツバチの学習した匂いによって誘発される匂い源探索歩行に対する尻振りダンス音の影響

* 山下俊也・伊東綱男・藍浩之（福大・理・地球圏科学）.

3. ゴミムシダマシの脛節に存在する新規な弾性器官の形態と機能

* 市川敏夫 1・坂本裕文 2・藤義博 1（1 九大・院理・生物、2 九大・院システム生命）.

4. カブトムシの爪に分布する機械感覚子の機能の行動学的解析

* 藤田立信(九大・院システム生命)・市川敏夫(九大・院理・生物科学).

5. カマキリ前胸神経節における運動ニューロンの細胞体地図の作成

* 高木啓吾（九州大・院システム生命）・山脇兆史（九州大・院理・生物科学）.

6. Mantis Olfaction. II - A new methodology highlights the antennal development and its sexual dimorphism in praying mantis (*Tenodera aridifolia*)

* Carle T. 1, 2・Watanabe H. 2・Yamawaki Y. 1・Yokohari F. 2（1 Dept. of Biol., Fac. of Sci., Kyushu Univ.; 2 Div. of Biol., Dept. of Earth Sys. Sci., Fukuoka Univ.）.

7. タンパク質リン酸化酵素 DYRK1A によるアポトーシス誘導機構の解明

* 穴井力・江頭恒（熊大・自然科学）.

8. RNA 結合タンパク質 RBM3 の局在が細胞の生存かアポトーシスかの運命決定を調節する

* 丸塚真佐希・生塩文子・江頭恒（熊大・自然科学）.

9. 翻訳抑制因子 Pdc4 が細胞のアポトーシス感受性に及ぼす影響

* 川口正俊・江頭恒（熊大・自然科学）.

口頭発表

1. クロオオアリの単仲間・非単仲間識別と触角感覚子の応答

近藤篤志・吉元一真（福岡大・理・地球圏科学）・塩路幸生（福岡大・理・化学）・渡邊英博・*横張文男（福岡大・理・地球圏科学）.

2. ワモンゴキブリ標準脳の作成

* 椋本聖悟・渡邊英博・横張文男（福岡大・理・地球圏科学・生物）.

3. ワモンゴキブリ触角におけるセロトニン陽性の機械感覚細胞の分布
*渡邊英博・下東美樹・横張文男 (福岡大・理・地球圏科学・生物).
4. ミツバチ背側葉における触角振動感受性ニューロンの応答と細胞形態の解析
*甲斐加樹来 (福岡大・理・地球圏科学)・池野 英利 (兵庫県立大・環境人間)・藍 浩之 (福岡大・理・地球圏科学).
5. カマキリの防御か捕獲の意思決定に対する先行視覚刺激の影響
*内田裕 (九大・システム生命)・山脇兆史 (九大・理・生物科学).
6. 味覚と栄養状態による摂食制御のカマキリにおける性的二型
*山下貴志(九大・システム生命)・Thomas Carle(福大・理・地球圏)・山脇兆史(九大・理・生物科学).
7. 脊椎動物の味蕾の起源と進化
*清原貞夫 (鹿児島大学)・Thomas E. Finger (University of Colorado).
8. Heterophilic interaction between CEACAM2-L and PVR on the semineferous epithelium of mouse testis
*Elsaid Salaheldeen・Hiroshi Iida (Kyushu Univ, Depart Zool).
9. マウスの雄性生殖器における Ceacam10 の発現と局在
*藤沙織・飯田弘 (九州大院・農・動物学).
10. 生殖細胞の分化に伴うセリン合成酵素 (PHGDH) 発現の推移について
*荒木敦之・金子たかね・飯田弘 (九州大院・農・動物学).
11. アフリカツメガエル精巣における JAK1 mRNA の発現解析
*百武慶一郎・宮本健太郎 (熊大・自然科学)・河崎敏弘 (国立遺伝学研究所)・久保田弘 (熊大・衝撃極限環境研)・安部眞一 (熊大)・高宗和史(熊大・自然科学).
12. ヌタウナギ補体系におけるパターン認識分子の同定
*山口智和・高宗和史(熊大・自然科学)・近藤昌和・高橋幸則(水産大・生物)・鶴木陽子・中尾実樹(九大・農学)・藤井保(県立広島大・人間).

参加人数： 117 名 (一般 52 名、学生 39 名、高校教諭 7 名、高校生 18 名、学会員外特別講演講師 1 名)

四学会合同沖縄例会 (沖縄生物学会を含む：沖縄生物学会 50 周年記念講演会を、四学会合同の講演会として開催)

日程：2013 年 5 月 26 日 (日)

場所：沖縄県立博物館・美術館

演題，演者：

基調講演：

1. この 50 年間どのような視点で生物たちを見て来たか

西平守孝 (一般財団法人 沖縄美ら島財団 参与・東北大学名誉教授) .

50 年の沖縄の自然と生物学会を振り返る講演：

2. 知花夜歩き ～40 年の記憶から～

千木良芳範 (元県立博物館・美術館副館長) .

3. ノグチゲラ探索記

安座間安史（辺土名高校校長）。

4. 私の出会った植物たち

神谷 保江（元県立高校教諭）。

9 国際動物学会議開催

2016年に日本で開催される国際動物学会議に関して、委員会を組織して計画立案を行った。開催場所は沖縄県と決定した。また、2013年6月に北京で開催された国際動物学会（ISZS）理事会にて、開催計画を発表し、承認された。（公益1）